

文華苑の桜が満開の平成11年4月、大和文華館では館長の交替がありました。約18年間、館活動に尽力されてこられた吉川逸治前館長が3月31日付けで退任され、水田徹（あきら）館長にバトンを渡

されました。そこで本誌をお借りし、新館長をお迎えして新たな飛躍を目指す文華館と学芸部員に長い間暖かい指導をされてきた吉川前館長への感謝と御礼の気持ちを表わしたいと思います。

吉川逸治前館長をお送りして

昭和56年(1981)6月に大和文華館第3代の館長に就任された吉川前館長は西洋美術史学の世界的な権威であられ、現在、日本学士院会員であられます。昭和8年に東京帝国大学文学部美術史学科を卒業されて間もなく、フランス政府給費留学生として渡仏され、パリ・ソルボンヌ大学文学部で中世美術史を専攻後、昭和14年、サン・サヴァン教会堂の黙示録壁画のご研究でドクトルの学位を受けられました。後年、昭和50年に同研究の偉業によってフランス国ボワティエ大学から名誉博士の称号を得られました。これを始めとして日仏間の美術を通してのご貢献が真に深いことなどは、すでに吉川館長の前任者石澤正男第2代館長によって本誌『美のたより』55号に紹介されています。その中でも、吉川先生が第二次世界大戦勃発の為フランス政府に没収されていた故松方幸次郎氏蒐集の龐大な西洋美術品を、最初にフランス政府と交渉されて、遂に日本に返還されるに至るきっかけを作られたことは永遠に語り継がれるべきことです。それによって昭和34年今の国立西洋美術館が創立されることになったからです。昭和34年から36年までパリ大学国際都市・日本館々長を勤められたほか、国内では東京大学で昭和44年まで長く教鞭をとられ、名誉教授となられ、他に東京芸術大学・名古屋大学・東海大学の教授を歴任され、東京高等師範学校(現筑波大学の前身)・京都大学・九州大学・横浜国立大学で講師をされ

ました。先生のご功績は、これまでに受賞されたパルム・ド・オフィシエ・ド・アカデミー記章(仏)、レジョン・ドヌール・シュヴァリエ勲章(仏)、紫綬褒章、勲三等旭日中綬章、フランス学士院賞に顕彰されました。

この輝かしい業績をもって大和文華館々長に就任され、私共館員は、その森厳な風貌に接し、身の引き締まる思いをいたしました。私事で恐縮ですが、その年秋の特別展の担当であった私は、特展テーマである「百済・新羅の金銅仏—飛鳥・白鳳仏の源流」について就任早々の先生からご助言や励ましのお言葉を戴きました。ご著書『日本美術入門』(平凡社 1966年英訳本あり)で、先生の日本・東洋美術への深い造詣を存じ上げていましたが、同展の図録への序文として記された次のお言葉は美術への深い愛情と理解を示された名文の一例であると思います。

「……ここに陳列される慎まじやかな小金銅仏群は、古代日本の古典文化の誕生を準備する種子の如き尊きものと映じて参ります。」

これを始めとして、毎年の特別展企画や、普段の館員研究指導に尽されたことは勿論、本誌『美のたより』への70回に及ぶ“美術の窓”の連載のなかでも先生の視点は常に世界の中の日本・東洋、西洋と対比しての東洋、古代オリエントから日本までの道のりという広い視野に立たれたものであり、それを述べられる言葉は豊かで示唆に富み、力強く、気品に満ちて



吉川逸治著『サン・サヴァン教会堂のロマネスク壁画』新潮社 1982年

います。そのように深い学識によって私共を導き、時には講堂で「パーミヤーン美術の追想」と題して、お若き頃、ギメ美術館長・東京日仏会館長アッカン教授に随行されたパーミヤーン探査の大変貴重なお話をされました。

そしてこれらにも増す、吉川前館長のご尽力は、就任4年後の昭和60年、開館25周年記念に際して

水田徹新館長のご紹介

第4代館長に着任された水田徹(あきら)館長は本年3月末に東京学芸大学教授を退官されたばかりで、今年満64歳を迎えられます。学生時代、吉川逸治東京大学教授のもとで指導を受け、昭和34年同大学文学部美術史学科を卒業され、同大学院博士課程を経て、昭和40年オーストリア政府給費留学生としてウィーン大学大学院博士課程に5年程留学され、同大学の学位を取得されました。帰国後、東海大学教養学部、昭和50年(1975)から東京学芸大学教育学部で造型芸術論、西洋美術史担当として20数年あまり教鞭をとられました。その間、同大学付属図書館長等の要職を併任されています。先生は古代ギリシア美術史の権威であられ、10年ほど前の、昭和63年(1988)に開催した秋季特別展「古代ギリシアの壺絵シルクロード文明のあけぼの」の開催の折には展示企画

の「美術研究所」の開設です。コンピューターや新しい撮影機器を導入しての未来の更なる美術研究の充実へ向けて、すでに幾つかの研究結果が出されております。

美術品も、先生の在任中に3件が重要文化財の指定を受け、また、新たに100件近くが加わり、その内には重要美術品2件が含まれています。

吉川前館長の後が、大学で先生の薫陶を受けられた水田徹新館長に引き継がれた今、また偶然にも、今秋の特別展「東アジアの金銅仏」の担当は私です。私共館員は、新館長の指揮の下に代々の館長と共に築き上げた館の伝統を守り、国内は勿論、世界へ向けて発信する美術館として益々努力する所存です。(村田靖子)

にご指導を頂き、カタログ製作のご執筆やご講演も賜り、早くから文華館とは深いご縁がございます。ギリシア陶器の研究から、最近ご研究を大成された『パルテノン神殿の造営目的に関する美術史の実地調査パルテノン・フリーズ図像様式一覽 Parthenon Project Japan 1994~1996』(東京学芸大学 平成11年3月)まで、緻密で着実な幅広い研究活動は定評があり、世界美術全集ものの古代ギリシア部門は、しばしば先生が責任編集をされておられます。就任直後の館内会議ではさっそく美術史に取り組む基本姿勢について、まず作品をよくみて、徹底的に観察することから美術史という学問は始まると熱意の程を語られました。文華館の今後の展望の一端が示されたと思っています。次号に水田館長の新任のご挨拶を掲載予定しております。(鈴木喜博)

季刊 美のたより No.127

平成11年 5月20日

発行 大和文華館